

【実践報告】

看護学科の社会貢献

「看護研究支援プログラム」の活動

社本 生衣¹⁾，小木曾 加奈子¹⁾，小林 和成¹⁾

竹下 美恵子¹⁾，杉浦 太一¹⁾

¹⁾ 岐阜大学医学部

要旨

岐阜大学医学部看護学科の社会貢献部会看護研究支援プログラム班として、岐阜県の保健・医療機関に勤務する看護職の研究能力の底上げを図ることを目指し研修会を実施している。看護研究の初心者を対象に研究テーマを決める、アンケートの作り方、結果の読み解き方などの内容で、講義を行い、その後個別相談会を開催している。年間5～6回開催している。平成29年度は116名、30年度は317名が参加された。テーマを決め発表まで進めることのできた参加者も多い。個別に相談することで初心者の些細な疑問を解決し、研究に対して苦手意識が緩和できているのではないかと考える。また、研修修了者が看護研究を継続することで、岐阜県の看護師の研究能力向上の一助になると考える。

キーワード：看護研究，研究支援，社会貢献

1. はじめに

岐阜大学は、「人が育つ場所」という風土の中で「学び、究め、貢献する」人材を社会に提供し、地域にとけこむ大学であるべきことを理念としている。岐阜大学医学部看護学科では、2016年度から、岐阜県を中心とする地域への看護職の定着、看護の質の向上を目的に社会貢献を行っている。本活動は「看護職輝き輝き（いきいき）プロジェクト」として、「卒業生支援プログラム」「専門職を磨く教育プログラム」「看護研究支援プログラム」「高大連携プログラム」「地域住民健康教育プログラム」の5つのプログラムで構成されている。その1つである「看護研究支援プログラム」は、看護専門職を磨くプログラムに対して岐阜大学に期待するニーズを調査した結果、「看護研究の取り組み方がわからないので支援してほしい」と多くの要望を受けて2017年度から発足した。本稿では看護専門職とは、看護師、助産師、保健師の国家資格のもとで就業している者である。以下、看

護職とする。

研究 (research) とは「問いに答えたり、あるいは問題を解決するために、学問的方法をもちいる系統的な探求」であり、看護研究 (nursing research) は、「看護の実践、教育、管理、情報科学など、看護職にとって重要な論点についての知識を開発するようにデザインされた系統的な探求」¹⁾ である。看護研究は、看護の現象すなわち看護活動に関することで、看護研究の結果は看護に還元でき、看護の質の向上と安定した水準の看護の提供の実践に役立てることが目的である。そのため、看護職にとって研究は、必要不可欠な探究活動である。

看護職は、専門職である。専門職とは、単に仕事をするという意味だけでなく、「頭脳を用いる職業」という意味付けがされている。2002年大学基準協会から提示された「21世紀の看護学教育」²⁾ で看護職に期待されることの中に、「看護学を志す者は、人々がより健康で自己実現への方向づけができるように、独創性豊かな研究を展開し、医療や看護学の発展に貢献する」と記載されており、たゆみない知識の拡大と研究が要求されている。すなわち、看護職すべてに研究的態度と取り組みが求められている。

医療機関や行政、臨床で働く看護職は、日々の業務と兼務しその役割を遂行するために努力している。しかし、看護職の基礎教育課程は複数あり、大学や専門学校など様々である。就労している看護職は同じ国家資格を得ていても、専門学校では看護実践に重きを置いた教育がなされてきた。そのため、看護職が看護研究に対して「難しい」と苦手意識を持っている。看護職が職務において看護研究への取り組みを困難にする要因には「時間確保が難しいなどの物的資源の不足」「病棟スタッフとの連携がない」などがあり、「指導者などの人的資源の支援」「病棟スタッフと連携」「物的資源の支援」などの研究支援を求めている³⁾。特に、「指導者などの人的資源の支援」では、看護研究をサポートする外部講師や看護管理者の存在があっても「計画書の書き方が十分理解できず、何度も返された時、行き詰まりを感じた」⁴⁾ といった報告があることから研究遂行のための基礎的な知識が不足していることが明らかになっている。

そこで「研究そのものがわからない」「輪番制で看護研究の担当が回ってきたが“わからない”」などの悩みを持ち、これから看護研究に取り組もうとしている、看護研究の糸口を見つけない、看護研究を始めるきっかけが欲しいなどの看護職を対象とした研修会を企画することにした。本稿では2017年度から2018年度の2年間の研修会の取り組みを振り返り報告する。

2. 実践内容

1) 看護研究研修プログラムの目的

初めて看護研究に取り組み、看護研究に行き詰まっている看護職を対象に、基本的な看護研究の知識に関する研修会を行う。個別・施設単位の個別研究相談によって研究に関する

る疑問などを解決していくことにより、岐阜県の看護職が自ら専門性を磨くことを可能にする。

2) 活動内容

開催の案内は、岐阜県公式ホームページ⁵⁾に記載されている病院施設一覧にある100病院の看護部長宛てに案内チラシ(図1)を郵送した。また、岐阜大学医学部看護学科のホームページにて案内した。

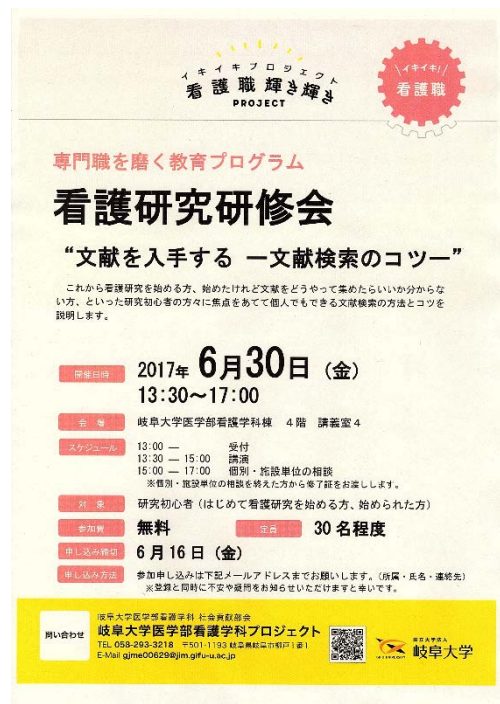


図1 看護研修会の案内チラシ

(1) 2017年度

2017年度は5回の研修会を開催した。第1回は、研究初心者を対象にグループワークを交えた講義を実施し、講義終了後は個別相談を行った。第2回から第5回までは、前半90分を各テーマに沿って講義を行い、後半で個別・施設単位での相談会の2部式で実施した。

さらに、高山・飛騨地区対象の研究会を3月に高山赤十字病院で開催した。「看護研究のテーマ決定からアンケート作成まで」とし、前半3つのテーマの講義を行い、後半に、個別・施設単位での相談会を実施した。個別相談は、研修支援班メンバー全員で担当した。

- ① 2017年度第1回 2017年3月16日(木) 13:00~15:30

テーマ：看護研究ははじめの一步～実践現場でできる看護研究のヒント～

看護学科の社会貢献「看護研究支援プログラム」の活動

「看護研究ってどのようにするの?」「どうやって研究テーマを決めるの?」といった疑問にお答えできるように、看護研究の初心者向けに「実践現場でできる看護研究のヒント」をについてグルーワークも交え講義を実施した。講義内容は、「実践現場で行う看護研究とは～キーワードは“現象”」、「疑問を磨く」「看護研究になりそうなさまざまな現象」「現象から派生した研究可能な疑問」「研究テーマを決める際に注意すること」「実践現場で看護研究を行う際の問題点」であった。

講師：杉浦太一，参加人数：73名

② 2017年度第2回 2017年6月30日(金) 13:30～17:00

テーマ：文献を入手する -文献検索のコツ-

これから看護研究を始める方，始めたけれど文献をどうやって集めたらいいかわからない方，といった研究初心者の方々に焦点をあてて個人でもできる文献検索の方法を説明した。

講師：杉浦太一，参加人数：35名

③ 2017年度第3回 2017年8月10日(木) 13:30～17:00

テーマ：看護研究もテーマを見つける -テーマに必要な要素を理解する-

これから看護研究を始める，始めたけれどテーマの決め方や重要性が今一つわからない，といった研究初心者の方に焦点をあてて，看護研究のテーマに含まれる言葉(要素)と実際の研究との繋がりについて説明した。

講師：小木曾加奈子，参加人数：34名

④ 2017年度第4回 2017年10月26日(木) 13:30～17:00

テーマ：量的結果の読み解き方 -アンケート集計データのここに注目する-

アンケートをとったものの，収集したデータをどう扱っていいかわからない。データの読み方がわからなくて困っているという研究者の方々に，アンケート調査のデータの読み解き方に焦点をあて量的結果の読み解き方の基本について説明した。

講師：社本生衣，参加人数：25名

⑤ 2017年度第5回 2018年1月23日(火) 13:30～17:00

テーマ：研究結果の伝え方 -図表のつくり方と発表のコツ-

研究結果を出してみたものの，どのように図表化したらうまく伝えられるかわからない，組織内や学会発表に向けての抄録・スライド作成の要点がわからなくて困っているといった研究者の方々に，研究結果の図表化や公表の仕方の基本について説明した。

講師：小林和成，参加人数：22名

⑥ 2017年度高山地区 2018年3月24日(土) 13:30～17:00

看護研究のテーマ決定からアンケートの作成まで

テーマ1：研究テーマを見つける -テーマに必要な要素を理解する-

テーマ2：文献を入手する -文献検索のコツ-

テーマ3：アンケートの作り方 -アンケートに必要な要素と選択肢作成の基本-
講師：テーマ1は小木曾加奈子，テーマ2は杉浦太一，テーマ3は社本生衣
個別相談会：杉浦太一，小木曾加奈子，小林和成，社本生衣，参加人数：51名

(2) 2018年度

2018年度は、6回シリーズとして、研究の進行に合わせた形のテーマで研修会を企画・実施した。前年度から継続している参加者へのアンケート内容に加え、第3回からは各回の研修会における学習目標（理解して欲しいこと）についてアンケートをとって、講演内容のブラッシュアップにつながるように工夫した。理解度は、「ガッテン」の数で回答してもらい、理解の程度に合わせ「ガッテン，ガッテン，ガッテン」から「ガッテン，ガッテン」「ガッテン」とし、理解ができなかったということを表す「ふ〜ん」までの4段階で理解度の回答を求めることとした。また、高山地区は8月と3月の2回実施した。個別相談は、研修支援班メンバー全員で担当した。

① 2018年度第1回 2018年3月22日（木）13：30～17：00

テーマ：看護研究のテーマをみつける -テーマに必要な要素を理解する-
2018年度第3回と同様の内容で実施した。臨床での研究開始時期を考慮し、テーマについて考えテーマについての講演を3月に実施した。

講師：小木曾加奈子，参加人数：37名

② 2018年度第2回 2018年4月12日（木）13：30～17：00

テーマ：文献を入手する -文献検索のコツ-

2018年度第2回と同様の内容で実施した。

講師：杉浦太一，参加人数：31名

③ 2018年度第3回 2018年6月29日（金）13：30～17：00

テーマ：アンケートの作り方 -必要な要素と選択肢作成の基本-
初めてアンケートを作る方，過去にアンケートを作成してみたがうまく結果が出なかったという方に，アンケートをとった後の集計や結果の出し方をふまえたアンケートの作り方を説明した。

講師：社本生衣，参加人数：58名

④ 2018年度第4回 2018年8月10日（金）13：30～17：00

テーマ：量的結果の読み解き方 -アンケート集計データのここに注目する-
2018年度同様に，アンケートをとったものの，収集したデータをどう扱っていかかわからない。データの読み方がわからなくて困っているという研究者の方々に，アンケート調査のデータの読み解き方に焦点をあて量的結果の読み解き方の基本について説明した。

講師：杉浦太一，参加人数：38名

⑤ 2018年度第5回 2018年10月25日（木）13：30～17：00

テーマ：研究結果の伝え方 -図表のつくり方と発表のコツ-

研究結果をどのように図表化したらうまく伝えられるかわからない、組織内や学会発表に向けての抄録・スライド作成の要点がわからなくて困っているといった研究者の方々に、研究結果の図表化や公表の仕方の基本について説明した。

講師：小林和成，参加人数：35名

⑥ 2018年度第6回 2019年1月22日（木）13：30～17：00

テーマ：結果と考察の書き方 -限られた字数での伝え方-

研究成果を抄録や論文として発表する際に、どのように文章を書いたらよいか困っているといった参加者の方々に、結果と考察の書き方に焦点を絞り、文章記述の基本的なマナーを踏まえた文章の書き方について説明した。

講師：杉浦太一，参加人数：38名

⑦ 2018年度第1回高山地区 2018年8月25日（土）13：00～18：30

テーマ1：量的結果のよみときかた -集計結果のここに注目する-

テーマ2：研究結果の伝え方 -図表のつくり方と発表のコツ

テーマ3：結果と考察の書き方 -限られた字数での伝え方-

講師：テーマ1と3は杉浦太一，テーマ2は小林和成

個別相談：杉浦太一，小木曾加奈子，小林和成，社本生衣，参加人数：29名

⑧ 2018年度第2回高山地区 2019年3月23日（土）13：00～18：30，

3月24日（日）10：00～12：00

テーマ：エクセルを使った上手な図表の作成法と統計手法の基本

講師：講義担当は杉浦太一，演習担当は小木曾加奈子，社本生衣

個別相談会：杉浦太一，小木曾加奈子，社本生衣，参加人数：11名

3. 結果及び考察

1) 参加者の背景（表 1.2.3）

2017年度開催の研修会の参加者は平均±SDは26.3±5.8名，2018年度は平均37.7±8.5名であった。高山地区は，平均30.0±19.0であった。2017年度より2018年度は増加しており，研修会の需要が増しているのではないかと考える。高山地区は，回数を重ねるごとに参加者が減少している。高山地区は，1日で3つのテーマの講習会を行うために受講者が十分に消化できず，疲労が残ってしまう状況にさらに土曜日の開催ということも影響しているのではないかと推測する。

看護研究教育の受講については，看護研究教育を受けたことが「ない」方が，2017年度は35.0～58.8%，2018年は33.3～55.2%であった。高山地区では，26.5～45.5%であった。一方，「ある」方は，2017年度は35.3～65.4%，2018年度は44.8～66.7%，高山と地区は54.5～71.4%と「ない」より多かった。どこで受けたかでは，ほとんどが大学，短大，専門学校と返答しており，学生時代に受けたものであり就職後は教育を受ける機会が

なかなか得られないと考える。

また、看護研究実施経験の有無の関しては、「ない」と返答された方が2017年度は32.0～70.6%、2018年度は47.2～66.7%であり看護研究に関して初心者の方が多く参加している。これは、公募で初心者向けの看護研究の初歩的な内容であることを示しており、気軽に参加してほしいという主催側の意図が伝わっていると考ええる。

しかし、職場における看護研究の支援体制については2017年度参加者で「ある」と返答した方が32.4～75.0%、2018年度では58.6～77.8%であった。具体的には、「大学の先生の指導がある」「研修会への参加」「研究促進委員会による指導」など組織による体制がとられている施設がある反面、「前年度研究をしたお姉さん看護師からの指導」「病棟の先輩看護師」など経験したものが相談に乗るレベルでの指導にとどまっている施設もあり看護研究の支援体制にも差があった。

研修会参加への経緯で「自分の希望」と返答している方が、2017年度は35.2～55.0%、2018年度は48.5～66.7%であり、看護研究について自らの課題を解決したいと行動していると考ええる。看護研究は、継続教育の中で課せられる課題であるが、施設によって看護研究の支援体制に差がある、また実施する環境に差があるなど、看護研究を実施する看護職の置かれた状況も様々である。そのため看護研究を実施すること自体が、看護職の負担となっている現状の中で、このような研修会の開催は看護職の負担を軽減し、看護研究への取り組みへの動機づけを高める意義があると考ええる。

表1 2017年度 参加者の背景

2017年度	第1回 (n=70)		第2回 (n=26)		第3回 (n=34)		第4回 (n=25)		第5回 (n=20)		
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
1) 取得免許・資格 (複数回答可)	保健師	8	11.4	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	助産師	4	5.7	1	3.8	0	0.0	0	0.0	1	5.0
	看護師	68	97.1	26	100.0	32	94.1	24	96.0	18	90.0
	その他	4	1.4	0	0.0	2	5.9	1	4.0	1	5.0
2) 研究教育を受けたことがあるか	ない	39	55.7	9	34.6	20	58.8	11	44.0	7	35.0
	ある	31	44.2	17	65.4	12	35.3	13	52.0	13	65.0
	無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	4.0	0	0.0
3) 研究実施経験	ない	37	52.8	15	57.7	24	70.6	8	32.0	11	55.0
	ある	31	44.2	10	38.5	10	29.4	16	64.0	9	45.0
	無回答	2	2.8	1	3.8	0	0.0	1	4.0	0	0.0
4) 研究の支援体制	ない	26	37.1	13	50.0	16	47.1	10	40.0	5	25.0
	ある	39	55.7	13	50.0	11	32.4	15	60.0	15	75.0
	無回答	5	7.1	0	0.0	7	20.6	0	0.0	0	0.0
5) 参加の経緯	自分の希望			12	46.2	12	35.3	13	52.0	11	55.0
	上司の薦め			12	46.2	20	58.9	10	40.0	8	40.0
	組織の決まり			0	0.0	1	2.9	0	0.0	0	0.0
	その他			0	0.0	0	0.0	1	4.0	0	0.0
	無回答			2	7.6	1	2.9	1	4.0	1	5.0

表2 2018年度 参加者の背景

2018年度		第1回 (n=36)		第2回 (n=29)		第3回 (n=54)		第4回 (n=36)		第5回 (n=35)		第6回 (n=36)	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
1) 取得免許・資格 (複数回答可)	保健師	5	13.9	0	0.0	6	11.1	0	0.0	5	15.2	2	5.6
	助産師	2	5.6	2	6.9	4	7.4	0	0.0	1	3.0	3	8.3
	看護師	27	75.0	26	89.7	48	88.9	35	97.2	25	75.8	31	86.1
	その他	2	5.6	1	3.4	3	5.6	1	2.8	2	6.1	1	2.8
2) 研究教育を受けたことがあるか	ない	17	47.2	16	55.2	25	46.3	15	41.7	11	33.3	12	33.3
	ある	18	50.0	13	44.8	28	51.9	21	58.3	21	63.6	24	66.7
	無回答	1	2.8	0	0.0	1	1.9	0	0.0	1	3.1	0	0.0
3) 研究実施経験	ない	24	66.7	19	65.5	31	57.4	23	63.9	18	51.4	17	47.2
	ある	12	33.3	10	34.5	23	42.6	13	36.1	14	40.0	19	52.8
	無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	3	8.6	0	0.0
4) 研究の支援体制	ない	8	22.2	9	31.0	7	13.0	9	25.0	8	24.2	8	22.2
	ある	25	69.4	17	58.6	42	77.8	23	63.9	25	75.8	26	72.2
	無回答	3	8.3	3	10.3	5	9.3	4	11.1	0	0.0	2	5.6
5) 参加の経緯	自分の希望	19	52.8	16	48.5	34	62.9	24	66.7	16	48.5	23	63.9
	上司の薦め	13	36.1	16	48.5	18	33.3	11	30.5	16	48.5	13	36.1
	組織の決まり	0	0.0	1	3.0	1	1.9	1	2.8	1	3.0	0	0.0
	その他	3	8.3	0	0.0	1	1.9	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	無回答	1	2.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0

表3 高山地区 参加者の背景

高山地区		2018.3 (n=49)		2018.8 (n=29)		2019.3 (n=11)	
		人数	%	人数	%	人数	%
1) 取得免許・資格 (複数回答可)	保健師	5	10.2	4	13.8	1	9.1
	助産師	6	12.2	2	6.9	0	0.0
	看護師	35	71.4	24	82.8	10	90.9
	その他	3	6.1	3	10.3	0	0.0
2) 研究教育を受けたことがあるか	ない	13	26.5	9	31.0	5	45.5
	ある	35	71.4	20	69.0	6	54.5
	無回答	1	2.0	0	0.0	0	0.0
3) 研究実施経験	ない	18	36.7	12	41.4	5	45.5
	ある	31	63.3	17	58.6	6	54.5
	無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0
4) 研究の支援体制	ない	3	6.1	6	20.7	2	18.2
	ある	40	81.6	19	65.5	9	81.8
	無回答	6	12.2	4	13.8	0	0.0
5) 参加の経緯	自分の希望	26	53.1	19	65.5	3	27.3
	上司の薦め	18	36.7	7	24.1	5	45.5
	組織の決まり	4	8.2	0	0.0	2	18.2
	その他	1	2.0	0	0.0	1	9.1
	無回答	0	0.0	3	10.3	0	0.0

2) 講義の今後への活用 (表 4.5.6-1.6-2.6-3)

講義の今後の活用について、2017年度、2018年度、高山地区すべてでおおむね活かそうとの回答を得た。2017年度8月実施の研修会で「看護研究もテーマをみつける-テーマに必要な要素を理解する-」では「活かそう」35.3%「少し活かそう」58.8%と「少し活かそう」の方が高かった。その理由として自由記述に、「6月には研究計画書を提出しなければならず時期的に遅い」との記述があった。このため、2018年度は同様のテーマで3月に実施したところ「活かそう」72.2%と「少し活かそう」25.0%を上回った。高山・飛騨地区で開催した研修会では、2018年度第1回の結果で「どちらでもない」が、テーマ①量的結果のよみとき方で17.2%、テーマ②研究結果の伝え方で13.8%、テーマ③結果と考察の書き方で20.8%であり、他の研修会にはない傾向であった。自由記述には、「少し難しかった」「理解できないところがあった」と意見があり、具体的な理解度をガッテンポイントで集計した結果でも、テーマ①について「ガッテン・ガッテン」60~40%と「ガッテン」が20%後半でほとんどであり、「ガッテン・ガッテン・ガッテン」の10~20%を上回っていた。このことから、今後の研究に活用できるところまで到達する

ことができなかつたことが要因でないかと考える。高山・飛騨地区は一度に複数の内容を講義する構成になっている。看護研究について初心者で経験の少ない方を対象にしているため、多くの内容では負担があった可能性がある。しかし、一方で「簡単だった」「今までの復習になった」との意見もある。この地区の研修会の参加者の背景で研究を実施経験が「ある」が50～60%、研究教育を受けたことが「ある」が50～70%と高い割合をしめている。そのため、講義内容は既習のことであり新たな学びはなく、今後への活用は少ないと判断されたとも考えられる。参加者の背景と要望を考慮して研修内容を構成する必要がある。

表4 2017年度 講義の今後の研究への活用

2017年度	第2回 (n=26)		第3回 (n=34)		第4回 (n=25)		第5回 (n=20)	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
活かせそう	17	65.4	12	35.3	12	48.0	14	70.0
少し活かせそう	9	34.6	20	58.8	9	36.0	5	25.0
どちらでもない	0	0.0	1	2.9	0	0.0	1	5.0
あまり活かせそうにない	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
活かせそうにない	0	0.0	1	2.9	0	0.0	0	0.0
無回答	0	0.0	0	0.0	4	16.0	0	0.0

表5 2018年度 講義の今後の研究への活用

2018年度	第1回 (n=36)		第2回 (n=29)		第3回 (n=54)		第4回 (n=36)		第5回 (n=33)		第6回 (n=36)	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
活かせそう	26	72.2	23	79.3	35	64.8	26	72.2	27	81.8	26	72.2
少し活かせそう	9	25.0	5	17.2	13	24.1	10	27.8	5	15.2	8	22.2
どちらでもない	1	2.8	0	0.0	3	5.6	0	0.0	1	3.0	1	2.8
あまり活かせそうにない	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
活かせそうにない	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
無回答	0	0.0	1	3.4	3	5.6	0	0.0	0	0.0	1	2.8

表6-1 高山地区 2017年度 講義の今後の研究への活用

高山地区 2018年3月 (n=49)	研究テーマを みつける		文献を入手する		アンケートの 作り方	
	人数	%	人数	%	人数	%
活かせそう	36	63.3	33	67.3	26	53.1
少し活かせそう	16	32.7	15	30.6	20	40.8
どちらでもない	0	0.0	0	0.0	0	0.0
あまり活かせそうにない	1	2.0	0	0.0	1	2.0
活かせそうにない	0	0.0	0	0.0	0	0.0
無回答	1	2.0	1	2.0	2	4.1

表 6-2 高山地区 2018 年度 第 1 回 講義の今後の研究への活用

高山地区 2018年8月 (n=29)	量的結果の よみとき方		研究結果の伝え方		結果と考察の 書き方	
	人数	%	人数	%	人数	%
活かせそう	11	37.9	15	51.7	14	48.2
少し活かせそう	11	37.9	8	27.6	7	24.1
どちらでもない	5	17.2	4	13.8	6	20.8
あまり活かせそうにない	0	0.0	0	0.0	0	0.0
活かせそうにない	0	0.0	0	0.0	0	0.0
無回答	2	6.9	2	6.9	2	6.9

表 6-3 高山地区 2018 年度 第 2 回 講義の今後の研究への活用

高山地区 2019年3月 (n=11)	エクセルでのデー タ入力と統計手法		きれいな図表の 作成方法		図表中の 仮設結果の入れ方	
	人数	%	人数	%	人数	%
活かせそう	8	72.7	8	72.7	5	45.5
少し活かせそう	3	27.3	3	27.3	1	9.1
どちらでもない	0	0.0	0	0.0	2	18.2
あまり活かせそうにない	0	0.0	0	0.0	0	0
活かせそうにない	0	0.0	0	0.0	1	9.1
無回答	0	0.0	0	0.0	2	18.2

3) 個別・施設単位相談の今後の研究への活用 (表 7.8.9)

個別・施設単位での研究相談会の今後の活用については、概ね「活かせそう」と回答している。自由記載にも、「聞きたいことを的確にアドバイスをいただいた」「個別的な質問がしやすかった」「やるべきことがわかった」「他者に話すことで頭の整理ができた」などとあった。個別としたことで、自分の研究進路に合わせた質問が具体的にでき、疑問や悩みを解決する機会となったと考える。

表 7 2017 年度 個別・施設単位相談の今後の研究への活用

2017年度	第2回 (n=26)		第3回 (n=34)		第4回 (n=25)		第5回 (n=20)	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
活かせそう	20	76.9	22	64.7	18	72.0	11	55.0
少し活かせそう	2	7.7	10	29.4	3	12.0	7	35.0
どちらでもない	0	0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
あまり活かせ	0	0	0	0.0	1	4.0	0	0.0
活かせそうにない	0	0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
無回答	4	15.4	2	5.9	3	12.0	2	10.0

表8 2018年度 個別・施設単位相談の今後の研究への活用

2017年度	第1回 (n=36)		第2回 (n=29)		第3回 (n=54)		第4回 (n=36)		第5回 (n=33)		第6回 (n=36)	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
活かそう	24	66.7	18	62.1	30	55.6	20	55.6	20	60.6	16	44.4
少し活かそう	6	16.7	3	10.3	10	18.5	8	22.2	4	12.1	4	11.1
どちらでもない	2	5.6	0	3.4	3	5.6	0	0.0	0	0	2	5.6
あまり活か	0	0.0	0	0.0	1	1.9	0	0.0	0	0	0	0.0
活かそうにない	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0	0	0.0
無回答	4	11.1	7	24.1	10	18.5	8	22.2	9	27.3	14	38.9

表9 高山地区 個別・施設単位相談の今後の研究への活用

高山地区	2018.3 (n=37)		2018.8 (n=29)		2019.3 (n=11)	
	人数	%	人数	%	人数	%
活かそう	17	45.9	15	51.7	4	36.4
少し活かそう	6	16.2	3	10.3	1	9.1
どちらでもない	1	2.7	1	3.4	0	0.0
あまり活かそうにない	0	0.0	0	0.0	0	0.0
活かそうにない	0	0.0	0	0.0	0	0.0
無回答	13	35.1	10	34.5	6	54.5

4. おわりに

2019年度で看護研究研修会は3年目を迎える。臨床で働く看護職は、忙しい日常の看護業務に加え看護研究を行うことは容易なことではない。「看護研究支援プログラム」では、看護研究とは何だろう、何をすればいいのだろといった臨床で働く看護職の疑問を、少しでも解決でき気軽に参加できる研究会としたいと考える。

前野ら³⁾は、臨床看護師は、研究に関する知識を十分にもっておらず、研究支援をする人が必要であると指摘している。また、研究をスムーズに進めるために一連の研究プロセスを学ぶセミナーを開催することと個々の質問に答えられ、研究実施者のニーズに対応できるシステムが必要と指摘している。

「看護研究支援プログラム」の目的は、日常の看護業務と両立して看護研究を継続的に進められるよう支援を行うことである。その実践としては、看護職の看護研究を進める上での些細な疑問や悩みを気軽に相談に乗り、共に解決の糸口を見つけていくことである。岐阜県における看護研究の活性化の中核的拠点となるように、社会貢献として看護学科で取り組んでいきたいと考える。臨床で活躍する看護職の方々にとって、看護研究が“負担”ではなく“楽しみ”になるよう小さな疑問や困っていることを大切に、支援を続けてきたい。看護職が看護研究に取り組むことで、日頃の看護を見直し看護の質の向上になる。また看護職自身を専門職として磨くこととなると考える。

【参考文献】

- 1) Denise F.Polit, Bernadette P.Hungler (著), 近藤潤子 (監訳) : 『Nursing Research : Principles and Methods』看護研究－原理と原則 第2版, 医学書院, 2010.
- 2) 大学基準協会編, 大学基準協会資料, 第56号, 大学基準協会, 2002.
- 3) 前野真由美, 永田由紀子, 島田美佐, 神吉敬子 : 臨床の場における看護研究の難しさと求められる支援, 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 第22号, 9-15, 2008.
- 4) 平松みどり, 河合敏子, 山田恵子, 市川智恵子, 石塚淳子 : 臨床看護研究の支援体制を充実させる取り組み 研究に取り組んだ看護師の面接から「阻害因子」を知る, 日本看護学会論文集 看護管理, 第35回, 9-11, 2004.
- 5) 岐阜県公式ホームページ 清流の国ぎふ, 病院名簿, 病院施設一覧,
<https://www.pref.gifu.lg.jp/kodomo/iryo/iryo-kikan/11229/byoin-meibodata/02byouinmeibo.pdf>